

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20730560
 研究課題名（和文）戦後歴史教育におけるナショナル・アイデンティティ形成論に関する研究
 研究課題名（英文）Research on National identity formation theory in history education on Postwar Japan

研究代表者

角田 将士（KAKUDA MASASHI）
 立命館大学・産業社会学部・准教授
 研究者番号：70432698

研究成果の概要（和文）：本研究は、歴史教育を通じた「日本人」としてのナショナル・アイデンティティ（国民意識）形成の論理を、1945年を画期とする戦後の学校教育、とりわけ小学校の歴史教育を主な分析対象として明らかにしたものである。戦後歴史教育は、一貫して子ども達に国民意識を植え付けるための装置として機能してきており、それゆえ抜本的な改革が行われてきていないにもかかわらず、今日に至るまで教育課程上に確固たる地位を築いてきている。

研究成果の概要（英文）：This research is clarifying of the logic of the National identity formation in the history education on Postwar Japan. The history education consistently plants the national consciousness in children, therefore, has built a firm position on the curriculum after the war though has not been done a drastic reform until extending to the present.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：戦後，歴史教育，教科書，ナショナル・アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

わが国において社会科が成立してから60年が経つ。その間、わが国の社会科教育学

研究は、アメリカ合衆国などの先進的な国々に学ぶことによって著しく進展した。しかし「地理」や「公民」とは異なり、「歴史」に関しては、優れた教育論（歴史を教えること

を自明視し、あくまで時系列に従った固定的な内容編成を志向する教養主義的な歴史教育論ではなく、現在社会を理解するための一手段として歴史を位置付け、必ずしも時系列に従うのではなく、現在の社会問題などをベースにした内容編成を志向する実用主義的な歴史教育論)が紹介され、それらに基づくカリキュラムや実践が提案されてきたにも関わらず、抜本的改革は未だになされていない。

なぜわが国においては「社会認識を通して市民的資質を育成する」教科としての社会科の機能と目的を達成するための「手段」として、歴史教育が位置付けられてこなかったのか。なぜわが国においては社会科教育学の世界で絶え間なく主張された実用主義的な「社会科歴史」としての歴史教育のあり方は実現されてこなかったのか。それにもかかわらず、なぜ今日においても、歴史教育は教育課程上に確固たる地位を占め続けているのか。この問いはわが国における歴史教育改革の前提となる極めて重要な問いであると考えられるが、理想の歴史教育のあり方を求める研究が主流となる中で看過され、そこにアプローチしようとする研究はなされてこなかった。

2006年12月、戦後教育のあり方を規定した「教育基本法」が改正された。この改革の名分として、戦後教育においては「日本人」としての意識を涵養しようとする側面が欠如していたと何度も述べられてきた。しかし本研究はそれとは正反対の結論を導くことが予想される。学習指導要領レベルでは何度も改革が行われたものの、歴史教育は一貫してナショナル・アイデンティティ形成の機能を維持していることが予想され、その論理は本研究を通して解明されよう。

歴史教育改革は、本研究の成果を踏まえた上で論じられなければ、どのような意義のある教育論であったとしても机上の空論に留まる。本研究の意義は、歴史教育改革の前提となる基本的な、しかしこれまで看過されてきた点についての新たな知見をもたらそうとするところにある。

本研究は上記のような研究的背景のもとで遂行された。

2. 研究の目的

本研究は上記の問いに対して「ナショナル・アイデンティティ形成」、「集合的記憶(国民的統合の物語)の創出と忘却」を視点として仮説的に設定しアプローチしていこうとするものであった。

これまでの研究の中では、戦前の歴史教育の展開を、その時々国家が要請する国民的統合の物語のあり様に依拠して、歴史教育内容が修正されていった過程として読み解いて

いく中で、歴史の学習を通じたナショナル・アイデンティティ形成のストラテジーを解明してきた。そこでは、過去と現在とを一貫する歴史と捉えさせる時系列に沿って内容を編成し、現在の国家のあり様は歴史的必然性の上に成り立っているとする物語を学ばせることで学習者に国民として意識を涵養しようとするものになっていた。そのような戦前と決別したはずの戦後において、数回の学習指導要領の全面改訂の中、国民的統合の物語の創出と忘却の機能はいかなる論理によって維持されてきたのか。

本研究においてはこれまでの研究成果を踏まえて、学習指導要領やそのもとで執筆された教科書、それらをもとに行われた授業実践を分析することでその点について迫っていくことをめざした。

これまで戦後の歴史教育について、ひとつの視点から体系的にその展開を論じた研究はなされてきていない。その体系的な研究は「社会科歴史」の理念とは相反する、しかしわが国においては、歴史教育に期待されてきた(と予想される)「ナショナル・アイデンティティ形成」を視点になされることが、よりよい歴史教育のあり方を論じそれを実現していく上で最も重要である。

3. 研究の方法

先述した課題に対してアプローチしようとするれば、複数年にわたって継続的に研究を進めていく必要がある。本研究においてはその基礎的段階として、まずはすべての学校段階の基礎となる小学校を対象に、また分析対象を学習指導要領と教科書に焦点化し、次の二点に着手する。

第一に、分析対象となる小学校用の歴史教科書の選定及び収集である。本研究においては、下記の4つの基準から分析対象となるべき教科書を選定する。

1947(昭和22)年の社会科成立以前、系統的な歴史学習が行われていない昭和22年版学習指導要領の時期については、二種類の文部省著作の教科書、『くにのあゆみ』(昭和21年)と『日本のむかしと今』(昭和23年)を取り上げる。

昭和26年版学習指導要領の時期以降については、指導要領の全面改訂直後の検定教科書を取り上げる(同じ指導要領の間は誤植等を除いて内容は変更されないため)。

本研究の成果を踏まえて、将来的には学校段階による比較検討をめざすため、中・高との比較が可能な日本史的内容の教科書(指導書も含む)を取り上げる。

「教師の支持の高低」「全国レベルでの授業への影響力の高低」と読み替えることができる採択シェアが上位（概ね下記の3社とするが、教育出版、光村図書のものも同時に収集し、分析結果の検証素材とする）の教科書出版社の一般的教科書を取り上げる。

第二に、学習指導要領レベルでの分析とともに、収集した教科書について、全体構成レベルでの比較分析、すべての教科書において取り扱われている小単元（例えば「明治維新」など）を事例に記述構成を分析し、戦前との比較を意識しながら、それぞれがどのような歴史認識の形成を通してナショナル・アイデンティティを学習者に涵養しようとするものになっていたのかを実証的に解明し、各期の特殊性と戦後に一貫する共通性を抽出する。

4. 研究成果

収集した教科書を分析し、戦後歴史教科書に共通する特質を、下記のように抽出することができた。それを、分析対象の一つであり、戦後歴史教科書のスタートに位置付く『くにのあゆみ』を事例に述べると下記の通りである。

戦前の教育、とりわけ歴史教育は、国家のために命を投げ出すことを是とする国民を育成するための中核的な役割を果していた。それは、国家主義的な解釈に基づいたひとつの歴史の流れを、絶対的な真理として教え込んでいくためのものになっており、その内容は、古代から現代に至る一貫した歴史の流れ＝「縦の歴史」に徹底したものになっていた。それは、連綿と続く伝統を、厳然たる事実として教えることで、学習者である子どもに、国民としての生き方を学ばせようとするものであった。

いうまでもなく、戦後の新教育は、戦前の教育の反省の上に立ち、自主的自立的な思想・生き方の形成を支援するところをねらいとしている。その学習原理とは「批判的思考」である。与えられた物語やそこに付与された意味を事実として無批判に受容していくのではなく、それを「学習内容」として捉え、批判的に理解し、時にはそれに対抗していくことで、自らの思想や生き方を自立的に選び取っていくことができる力を育成するところにある。事実、そのような力を育成する教科として「社会科」は成立していく。新教科である社会科が成立する以前においても、『くにのあゆみ』では歴史学習の目標を「歴史の批判的理解」に定めていた。つまり、戦前の反省の上に立って新しい歴史学習を志向するという点では、社会科の理念を先取りしようとしていたといえる。そして『くにの

あゆみ』においては、その内容レベルにおいては、転換した国家体制に相応しい新しい国家物語が創出されていた。

しかし、それをどのように学ばせるのかといった学習方法のレベルにおいては、戦前における「歴史物語による教化」を維持するものになっていた。その論理的帰結は、『くにのあゆみ』においては、戦前期の歴史教科書である『初等科国史』がそうであったように、創出された新しい歴史物語を、古代から現在へと至る、因果的関連の総体としての歴史として捉え、それ自体を事実として学習することによって、現在と歴史との連続性を理解させ、望ましい生き方を身に付けさせようとするものになっていたといえる。

『くにのあゆみ』が想定している歴史学習の特質とは、古代から現在へ至る、すでに解明された因果関係の総体としての歴史（＝創出した新しい「民主国日本」の歴史物語）をそれ自体として学習させる、というものである。ここでは、古代から現在へと連続した歴史の発展過程、つまり「縦の歴史」がすでに教える側に想定されており、それは「教育内容」として意図されている。学習者である子どもは、それ自体を事実として学ぶことによって、歴史と連続するものとして、現在社会のあり様を認識していくことになる。結果としてそれは、新しい国家体制を支えていくために求められる国民的な心情を子どもたちに育成する、「時間的・社会的趨勢学習」ともいべきものになっていたと考えられる。

民主国日本に相応しい新しい歴史物語を提示した『くにのあゆみ』の内容から想定される歴史学習は、歴史的事象そのものが持っている因果的関連の総体を、歴史と捉え、それに沿って古代から現在へと、順序よく学習させることとして捉えることができる。それは、歴史が現在に生きる子どもたちに生き方を示唆するという、原理的には戦前のそれと同質のものであった。

このような性格は、基本的に戦後各期の歴史教科書にも共通して見られる特質であった。それぞれの時期の歴史教科書において、取り上げられる歴史的事象や人物は、下記の表1のような形態で断続的に修正がなされ

表1：歴史教育内容修正の諸類型

1	維持	
2	削除	
3	修正	(1) 不適切な部分の削除
		(2) 適切な部分を追加
		(3) 解釈自体の修正
4	追加	

ていったものの、教科書が子ども達に育成する歴史認識の内実や認識形成の論理は一貫していた。

つまり、日本という国家の存在を自明視し、それを過去に投影することで、その存在を歴史的な必然性をもつものとして子ども達に教授しようとするものになっており、その意味で、戦後歴史教育は、戦前のそれと同様に、子ども達のナショナル・アイデンティティの形成に大きな貢献をしてきていたといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

角田将士「戦後初期歴史教科書『くにのあゆみ』における歴史認識形成の論理 - 戦前国定国史教科書との比較から - 」全国社会科教育学会編『社会科教育論叢』第47集，査読無，2010年11月刊行予定(6月30日入稿予定)。

[学会発表](計3件)

角田将士「教科教育学研究としての社会科教育史研究とは - 諸研究の研究目的に着目して - 」学校教育研究会第13回定例会，2009年11月8日，同志社大学。

角田将士「戦後初期における社会科歴史教育論の特質」全国社会科教育学会第58回全国研究大会，2009年10月10日，弘前大学。

角田将士「認識形成の論理を視点として社会科教科書史研究の方法論」全国社会科教育学会研究プロジェクト「社会科教育史研究の体系化と新たな研究方法論を探る」第1回中間発表会，2008年6月6日，大分県総合文化ホール。

[図書](計3件)

片上宗二・木村博一・永田忠道編『激動の社会科』明治図書，2010年9月刊行予定(入稿済)(担当部分：第2章第3節「子ども達が熱狂した歴史教育」)

社会認識教育学会編『地理歴史科教育』学術図書出版，2010年9月刊行予定(入稿済)(担当部分：第1章「地理歴史科教育

論・実践の歴史」)

角田将士『戦前日本における歴史教育内容編成に関する史的研究』風間書房，2010年3月，全257頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

角田 将士 (KAKUDA MASASHI)
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：70432698